

パネルディスカッションの概要

○ 4月22日（土） テーマ「各分野のスペシャリストが語る鈴木商店と神戸」（歴史探訪編）

パネリスト： 小林 正幸（双日株式会社サステナビリティ推進室 専門部長）
村田 裕子（LiveUpCapsules 代表 作家・演出家）
小林 由佳（神戸新聞社 論説委員）
小代 薫（神戸大学 未来世紀都市学研究アライアンス 特命講師）



Q：鈴木商店の発展に伴って神戸はどのように変貌していったのか？

A（小代）：神戸の都市形成史そのものと思うが、多くの人が神戸に集まって来て多様性が生み出され、鈴木商店はそのような環境をフルに生かして業容を拡大していった。

Q：舞台の登場人物の中で最も凄いと思う人物・気になる人物は？

A（村田）：西川文蔵（小林正）：高畑誠一と永井幸太郎（小林由）：依岡省輔
（小代）：金子直吉

Q（小林正 ⇒ 村田）：西川文蔵のファンが急増中だが、この舞台の主役は金子直吉なのか西川文蔵なのか？

A（村田）：私の中では登場人物全員が主役である。全員が金子直吉の魂を引き継いで、金子を超えて行こうという勢いを持っていた。だからこそ、鈴木があそこまで成長できたと思う。

Q：色々なキャラクターの人材（猪突猛進の人、慎重な人等々）が金子直吉の下に集まり、様々な人がいたからこそ、鈴木商店が成り立っていたと思うが如何か？

A（小林正）：この舞台を通じて感じたことは、鈴木商店には多様に満ちた人達（エリート気質の人、オタク気質の人等）がいて、しかも皆生き生きとして多様性が生きていた。それは、金子は若手社員に仕事を任せ、その上に“よねさん”がいて、家族的な雰囲気があったから。鈴木商店には様々な人材を受け入れる土壌が出来ていた。この点が、鈴木商店と他の財閥との大きな違いである。

鈴木商店の経営破綻後も、ゆかりの多くの企業は100年経っても存続しており、鈴木DNAはしっかり引き継がれている。

多様性に満ちていた鈴木商店は、それゆえに一気に統制がとれなくなってしまった。外部環境が悪化した時にどのように統制が取れるかが重要なポイントであろう。

A（小林由）：鈴木商店は人材と事業を生み出すという役目を果たした。若い人に任せ、任された者は自ら考えて動く。このことは今でも中々出来ておらず、人材育成の難しさである。

Q：鈴木商店が神戸の歴史に残したものは？

A（小代）：神戸の街が持っていた多様性を最大化させ、多様な凄いものを残した。

A（小林由）：新しいビジネスモデルを創り出した。（例えば、ダイエー、ファミリア、アシックス）
このようなビジネスモデルの創出は、鈴木商店の DNA ではないだろうか。

A（小林正）：鈴木商店は神戸だけではなく、全国各地に大きな功績を残したことを申しあげておきたい。大里（北九州）、米沢（山形）、清水（静岡）等々

以上

○ 4月23日(日) テーマ「鈴木商店ゆかりの財界人とともに語る鈴木商店と神戸」(未来志向編)

パネリスト：川崎 博也(株式会社神戸製鋼所 特任顧問)
泉谷 幸児(双日株式会社常務執行役員 関西支社長)
小林 由佳(神戸新聞社 論説委員)
小代 薫(神戸大学 未来世紀都市学研究アライアンス 特命講師)



Q: 多様な人材が鈴木商店から輩出されたが、鈴木商店でこの方は凄い、この方は今の時代でも通用するのではないかと思う方は何方か?

A (川崎): 鈴木よね (泉谷): 金子直吉
(小林): 西川文蔵 (小代): 金子直吉

Q (川崎様ほかへ): 川崎様はインタビューなどで“行って動かせ、行けば動く”という言葉を使っておられる。鈴木商店の社員は金子直吉を始め行動力に長けた方が多かったと思うが、鈴木イズム、金子イズムは現在の神戸製鋼所にも受け継がれているか?

A (川崎): 金子直吉は国益を考えて行動していたが、そこが私との決定的な違いである。当時の状況からして、金子は社員に任さざるを得なかった。また社員も自ら行動せざるを得なかったと思う。鈴木イズム、金子イズムは間違いなく神戸製鋼所に受け継がれている。

A (泉谷): 日商岩井(現・双日)には仕事を任せる風土があり、私は今も仕事を楽しくさせていただいております、当社も鈴木商店のDNAを受け継いでいると思う。

A (小林): 鈴木よねは、金子直吉にとことん任せた。任せるだけではなく、責任を取った。このことに意気を感じた金子はより一層頑張った。若手は安心して活躍できたのである。

Q (川崎様へ): 神戸製鋼所の初代支配人、田宮嘉右衛門という人物についてお伺いしたい。

A (川崎): 製鋼業は非常にリスクの高い事業であるが、金子直吉は製鋼業に関する知識がなかった田宮を神戸製鋼所の初代支配人に指名した。金子は田宮の慎重にして大胆な性格を見抜いていたのだろう。金子は神鋼の生みの親、田宮は育ての親と言われている。

金子から受け継いだと思われる田宮の精神は現在の神戸製鋼所にも受け継がれている。

(教育の大切さについて)

A (小林): あの時代(大正初期)に鈴木よねは女性の教育の大切さを訴え、神戸女子商業(現・神戸市立神港橋高校)の設立に多額の寄付をした。若い人を教育する、人を育てる機能があったからこそ、神戸は大きな転換期を乗り越えて発展して行ったと思う。

Q： 新人との向き合い方は？

A（川崎）：仕事を与えることが教育に繋がる。とにかく仕事を与えて頑張れということかと。

A（泉谷）：OJTの熱血版。現場に出させて、見させて、触れさせることが教育かと。この点は100年前と何等変わっていないと思う。

A（小林）：自分は先輩の背中を見て学べと言われたが、背中を見ても学べないと思う。ただ行け行けではなく、本人に納得して仕事に当たってもらうことが必要と思う。金子直吉と西川文蔵のような上司の両者が必要だと思う。

A（小代）：学生に任せても、こちらも（サポートの）準備をしておくことが必要になる。西川文蔵のような方が必要だと思う。

Q： 神戸という街が果たす役割とは、神戸から発信できることとは？

A（川崎）：鈴木商店傘下の会社名には国のためという意味で“帝国”“日本”などの名称が付されていたが神戸製鋼所だけは最初から変わらず“神戸”のままである。これは、神戸から始めよ、日本のために神戸から発信せよ、という意味が込められているのではないかと考えている。

A（泉谷）：関西は産学連携がしやすい土地。神戸のポートアイランドはバイオテクノロジー、メディアの拠点であろう。そこからまっしぐらに世界に発信して行って欲しい。

A（小代）：神戸大学も産学連携を目指して、神戸から発信していかねばと思っている。

A（小林）：“使える人間には癖がある”というのが金子直吉の口癖であり、鈴木商店は癖のある人間を沢山雇った。神戸は、そのような挑戦する（使える）人間を引き付ける場所が玄関口の神戸港であった。現在なんとなく寂しい感じになっている神戸港や神戸空港をもっと魅力ある場所にブラッシュアップ、パワーアップして行く必要があるのではないか。

以上